
音恋

浩太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

音恋

【Nコード】

N15320

【作者名】

浩太

【あらすじ】

大学3年生の市井亜沙子（通称アサ）は、過去のトラウマが原因で恋愛に対して臆病だった。ある日、彼女の友達である吉田美奈子（通称ミナ）の彼氏、高橋誠（通称マコト）に久保田明（通称クボ）を紹介される。

1話：涙と音（前書き）

男性恐怖症になってしまった女の子をテーマに書いていきたいと
思います。処女作なので拙い文章かと思われませんが、よろしくお願
い致します。

1話：涙と音

私は逃げるのが得意だ。

これで何度目の恋だろう。

何もせずただ日々が過ぎ、そして恋は終わりを迎える。

「アサ、あの人はどうなの？」

「あー…うん」

「…アンタ、また終わったの？」

「…う……………」

ミナは私を見ると溜め息を吐いていた。

食べかけのスパゲッティをくるくるとフォークで巻くと、彼女はメイクを直そうとポーチを出す。

ミナは可愛い女の子。私何かより百倍可愛い。

男の子が惚れる、そして万人受けする格好。

ナチュラルというか、地味な私とは大違いだ。

（化粧だってミナと私じゃ大違いだよ、ミナは目がぱっちりで…顔だって小さくて）

「アサ？」

「あ…な、何？」

「何？じゃないでしょー？S君を遠くから見るだけで良かったの？
勿体ないよー！S君だって今彼女居ないんだから！！」

「あはは、私何かS君と釣り合わないから」

そう、釣り合わないのだ。

同じゼミのオシャレで人気者のS君。

もし、彼が私みたいな地味な子と並んだらどうなるだろう。

私のせいで彼が何を言われるか分からない。

そう思ったら、恋をするのが面倒になった。いや、逃げ出した。

（大体いつも一緒…そうやって逃げ出すのが私）

「アサは優しいしナチュラルな感じが男の子にウケるって」

「えー…ミナみたいなフェミニンの子がウケるって」

「そうかなあ…アンタはいい子なのになあ」

ミナは微笑んで、私の頭を撫でてくれた。

彼女は本当に良い子だと思う。

私みたいな子に構ってくれるから。

(有難いよ本当…)

食べかけのスパゲッティを口に運ぼうとすると、ミナが甘い声をあげた。

「マコトー!」

「あ……」

「よっ、ミナにアサちゃん」

ミナの彼氏のマコト先輩。

あまり男性に慣れてない私は、一瞬ビクリとして先輩に頭を下げた。そんなに仲良くもない私が、先輩に挨拶してもいいか分からないから。

けれども、マコト先輩は優しく笑いかけてくれる。

(良い人だね……)

ほっとしていると、マコト先輩の横に誰かが立っていた。

「マコト? その人誰??」

「あ、コイツ俺の友達のクボ」

「クボさんですね、こんにちは!!」

ミナが挨拶すると、そのクボって人は軽く頭を下げた。そして、頭を上げる時に私を見た。前髪が眼鏡にかかり、その隙間から彼の瞳が見える。一瞬怖くなつて椅子が揺れた。

「あ、クボ!この子アサちゃん!ミナの友達だから」

「クボさん!今彼女居るんですか!?あのですね、この子とっても優しくて真面目で、今彼氏募集して…」

「ミナ!!やめてよ!!」

私はミナに向かって怒鳴ると、彼女は目を丸くして驚いた。いや、マコト先輩も食堂に居る人達も驚いていたに違いない。急に恥ずかしくなつて、私はリュックを背負つて食べかけのスパゲッティの皿を持つとガタガタと椅子を避けた。

「ちょ、ちよつとアサ!ごめんつて!待つてよ!!」

「い、いい!私ちよつと図書館でレポートの資料探しに行くから!マコト先輩と先に帰つて!帰つてね!!」

「あ、アサちゃん！」

「せ、先輩達さようなら!!！」

焦りながら食べ残しの昼食をかたして、私は逃げ出すように食堂を後にした。

(最悪だ……)

図書館の自習室で、私は音楽を聴いていた。

さっきのことを忘れるためにいつもより音量を大きめにして聴く音楽が、心地よかった。

嫌なことがあると直ぐ音楽に逃げるのも私の癖だ。

重低音が耳に響くと何もかも忘れられる。

ベースの音が心臓に届き、脳が嫌なことを少しづつ忘れていく。

(次の曲……何にしよう……)

置いていたiPodを掴むと、すっと影がかかった。

振り向くと、私の心臓は止まりそうになった。

クボさんが立っていたからだ。

「……あ、あ……の」

「……何聴いてるの？」

「……え、え……」

「あ、聴こえてないか」

クボさんは急に私のヘッドフォンを外すと、もう一度口を動かした。

「何聴いてるの？」

「……………」

「あ、俺この曲聴いたことあるわ。最近出てきたバンドだよね」

「……………」

「…大丈夫？」

「う……………」

「…………え」

「う、うっ…うっ」

私は、クボさんを目の前にして泣きだした。

2話・風邪を引いた日

「……………」

「……………」

私は、クボさんと書庫置き場に居た。

正確に言えば、図書館の奥にある貴重な資料置き場だ。

泣きだした私を見て、クボさんは荷物を抱えるとヘッドフォンを私に付けたまま手を引いてくれた。

正直、冷や汗と焦りでパニック状態だった私は彼について行くことしかできなかった。

「此処さ」

クボさんが口を開くのを見て、私はヘッドフォンを取った。

漏れ出す音楽を止めないまま、積み重ねてある本に置く。

彼は薄暗い部屋の中で何か素振りを見せると、私の方向へ何かが飛んできた。

「… 苺牛乳」

「飲んでいいよ」

「……あの…私……」

「いいよ、謝らなくて」

「……すみません」

ピンク色のパッケージの苺牛乳と、クボさんのイメージが全く合わないと思いつつ私はストローを刺した。

口の中に広がる甘い苺の味。さっきまで泣いていたからか、喉が潤う気がする。

視線をクボさんに移すと、彼は窓際に寄りかかって外を見つめていた。

(… やばい、気まずい……急に話掛けられて泣きだす女何て居るか！とか思われてる…絶対そうだ…あー…何で泣いちゃったんだろう… 馬鹿じゃん私……)

自己嫌悪に陥っていると、私のリュックが震えだした。中を開けて携帯を取り出すと、ミナからの着信だった。

気まずい状況の中、唯一の救いだと思って電話に出ようとすると、クボさんが私のヘッドフォンを手に取った。

驚いて電源ボタンを押してしまい、着信が切れる。

「いいヘッドフォン持ってるね」

「あ、あ……」

「大丈夫？」

「は、はい……」

私は携帯をリュックの中にしまうと、俯いて溜め息を吐いた。

（私って最上級のバカなんじゃなからうか……ああ、早く部屋から出たい……もっかいミナから着信来ないかな……それに出れたら直ぐ部屋から出て行ける口実になるのに……）

「泣き止んだね」

「あ、は……はい」

「もしかして、男性恐怖症？」

「……………」

何となく痛いところを突かれて、私はよろける。

クボさんに多分悪気はないのだ。だけど、何となく心が痛む。

二、三度頷くと彼は「そっか」とだけ言って黙ってしまった。

何も言わないクボさんに、私は何だか胃の辺りがグルグルしてきて

立ちあがる。

そして、こっぴどい放ったのだ。

「あのですね、別に泣いたまま放置しておいて良かったんですよ、話掛けて泣きだす女の子何てそうは居ません。慰めるのも面倒ですよ？というか面倒な女に話し掛けちゃったな、とか思ってるならほっといて良かったんですよ……！！！！！」

沈黙が辛くて言い放った言葉。

普通の女の子何かこっぴどい言わないはずだ。

私は、変わってるからこんなこと言えるのかもしれない。

というか、何でこっぴどい言ったのか本当にもう自分が分からない。

(……………あー…爆発したい、死にたい…もう……………)

じわりと視界が霞んで、頬に雫が伝った。

クボさんは何も言わずに私を見ていた。

私は彼の視線が辛くて、慌ててリュックを背負うと部屋を飛び出そうと扉に向かった。

ノブを掴むと、リュックを引っ張られ後ろによろける。

「泣いてもいいんじゃない？」

「……………」

「怖かったなら仕方ないでしょ」

「……」

「男性恐怖症なら、仕方ない。最初、俺に声掛けられて泣いた時…この曲聴いてたから泣いてると思った」

「…あ」

クボさんはiPodとヘッドフォンを私に渡すと、ポンポンと頭を撫でた。

「怖いなら、俺で慣れてみたらいいよ。普通に話しかけたり挨拶したら返すし。それに面倒だと思わないし、嫌いじゃないから」

「……」

「あ、頭撫でるのも駄目だったかごめんね」

「……」

「はい、じゃあまたねアサちゃん」

クボさんは私の背中を押すと、扉を開けて部屋から出してくれた。部屋から出ると、隣に心配そうに待っているミナが居た。

私は呆けたままミナに近付くと、彼女は申し訳なさそうに私へ手を合わせた。

「アサ！…ごめん！…本当ごめん！…」

「…ミナ」

「うう、謝って許されないと思う…だから、今度お昼奢るし授業のノートと…アサ？アンタ頬赤いけど大丈夫？？」

「……」

「え、風邪じゃないのアンタ大丈夫！？ちょ、本当におでこ熱いし！早く帰ろっ？ねっ？」

「……」

その日、私の心にぽっかりと空洞が出来たのだ。

そして、私は風邪を引いた。

3話・その想いには気付かず

風邪を引いて3日間私は学校を休んでいた。

ゼミの先生に提出するレポートを書き上げるために、私は3日ぶりに学校へと足を運んだ。

静まりかえっている図書館で私は資料を見つけると、あの部屋を見つめた。

(……居ないよね?)

本棚の隙間から部屋を見つめていると、書庫の扉が開いた。ハツとして逃げようとする、部屋から彼が出てきた。

(クボさんだ……って、何これ私ストーカーみたい気持ち悪い……)

嬉しいと思う反面、自分の行動が気持ち悪いと思ってしまい席に戻る。

本を捲り、レポートに少しづつ文を付け足す。

気が散らない様にヘッドフォンを付けたまま書きだしていると、レポートに影が落ちた。

「やっ」

「!?!」

突如現れたクボさんに私は驚いて席を立った。
図書館の司書さんが「お静かにお願いします」という声が館内に響いた。

私は恥ずかしくなって座り直すと、クボさんは私のレポートを呼んでいた。

「あ、あの」

「これ、卒論にしたら面白そうだね」

「え……」

「音楽と恋愛ねえ……」

「…変な題ですよ。それ、返して下さい」

「あ、ごめんね」

クボさんが私にレポートを渡す時、ほんの少しだけ煙草の匂いがした。

彼が煙草を吸う姿何て見たことがないから、私は少しだけその姿を想像した。

とても絵になるような、そんな気が少しした。

私がレポートを書きだすと、彼は私の目の前に座ったまま本を読み始めた。

気が散って、レポートに集中出来ない。

「あの…クボさん」

「何？」

「授業ないんですか？」

「ないよ、俺いつも暇人だから」

(…本当かな)

疑いの眼差しでクボさんを見つめていると、携帯が振動し始めた。開くとミナからメール。私は返信しようとしてボタンを押した。と思ったのに、私の手から携帯がふっと消えた。

「えっ」

「メアド、教えとくから」

「……」

「あ、大丈夫大丈夫。晒したりとか全く考えてないから」

「いや、その言い方怖いです」

「あ、そっか」

クボさんは私に携帯を渡すと、また本を読み始めた。
私は携帯のアドレス帳で彼のアドレスと確かめる。

(本当に入れてるし……わけ分らない人だなあ)

「クボ君」

可愛らしい声が聞こえて、女の子がクボさんの隣に歩いてきた。

「ホナミか」

「えへへ、クボ君やっぱ此処に居たんだ。あれ？この子……」

「……」

「マコトの彼女の友達のアサちゃん」

「どつも……」

その、可愛らしいホナミさんという人は、私を見つめると口角を上げクボさんに視線を戻した。

私はその時、ああ彼女はクボさんのことが好きなんだろうなと思った。

笑いかけたのではなく『貴方何かじゃ私に勝ち目はないわよ』とい

う、軽蔑の笑み。

クボさんとホナミさんが話を始めると、私はいたたまれない気持ちになって本をかたし始めた。

「どうしたの？」

「ミナが呼んでるのでそろそろ行きます、では」

「バイバイ、アサちゃん」

「……」

ホナミさんが満足げに手を振る姿に腹が立ったが、私はリュックを背負うと館内を足早に歩いて行った。

(何あの女……！ムカツク、何あの態度……！ぶりっこ女……！
……………)

「あーさーちゃん」

「えっ」

「待って待って」

振りかえるとクボさんが私を追ってきていた。司書さんの注意の声がまた図書館内に響く。

彼は私の腕を掴むと、手に何かのチケットを乗せた。

「これ、今度来てくれる？」

「……え、えっ」

「お友達誘って来てね」

「……」

「はい、って出来れば言っただけです」

「…は、はい」

「うん、じゃあよろしくー」

クボさんは私の手を離すとホナミの元へ戻っていった。
ホナミの顔が少しだけ険しかったのが、少しだけさまあみろと思っ
た。

（……今週の土曜日だ）

渡されたチケットの裏面にはライブ会場が記されていて、表面には
アーティスト名が書かれていた。
そのチケットには、私の好きなアーティストの名も書かれてあった。

4話：追いかけてライブハウス

「はあ……」

私はドーナッツを噛み締めながら今日のチケットを眺めていた。中に入ってるホイップクリームが指に付き、そのクリームを舐め取る。

気付くとカフェオレを飲み干していた。

「おかわりは如何ですか？」

「お願いします」

まるでタイミングを見計らったように、店員さんがカップにカフェオレを注ぐ。

熱々のカフェオレに口を付けると、舌が少しだけヒリヒリした。かちゃんと音がして、一枚のチケットにカフェオレの染みが浮かんだ。

じわりと染みが浮かんでいき、アーティストの名前が滲んだ。

『下北沢はお洒落なお店がたくさんあるよ!』ミナは楽しそうに話していた。

そんな彼女は今日のライブには行けなかった。マコト先輩との久しぶりのデートだったと聞いた。

私はチケットに書かれている場所へ歩を進めた。

「えっと、そのコンビニを右に……」

小さい頃から方向音痴の私には、チケットに描かれている地図は分かりにくかった。

コンビニを右に曲がり、お洒落なカフェを左へ、路地裏を真っ直ぐ進む。

気付いたらチケットに描かれていない場所へ着いた。

(完璧迷子だよね……)

仕方なく近くにあったお店で話を聞こうとすると、目の前をギターケースを担いだ男性が通り過ぎた。

私は慌てて彼の後を追って行く。ギターケースを担いでいるなら、ライブハウスへ向かうと思ったからだ。

彼は余程急いでいるのか、凄い速さで道を駆けて行く。

「はっ、速い！ま、待ってっ……」

角を曲がると、彼の姿はそこにはなかった。

辺りを見渡すと、地下へ続く階段が黒いお店にあった。

薄暗い階段の奥から、音が少しだけ漏れている。

「…此処だ」

ライブハウスの名前をチケットで確認すると、私は地下へ続く階段を下りた。

5話・聞き覚えのある声

「いらっしやい」

「ど、どうも…あの、これ」

地下への階段を下りると、扉の横に怖そうな男の人が座っていた。私は、おどおどしながらチケットを見せると彼はそれを受け取り、私にチラシを渡す。

「はい、これ今日の出る奴等のバンドのチラシね。後、このライブハウスの予定と…」

「あ、ありがとうございます」

「ねえ」

私がノブに手を掛けると、男の人は私に声を掛けた。

振り向くと彼は私をまじまじ見つめている。

何だろうと、私は彼を見つめると男の人はにこっと笑った。

「可愛い子だね」

「えっ」

「今日、一人で来たの？ライブ後時間とかないかな？」

「あ、あの私…明日は…」

「ちょっと、ケンジさん」

聞き覚えのある声が私の後ろから聞こえてきた。

振り向く前に、その声の主は私と男の人の間に入る。
大きな背中だと、思った。

「女の子のナンパは止めてよね、奥さんにチクリますよー？」

「うわ〜ヒロ君キツイわそれ！アヤだけには言わないで！」

「聞こえ取るわ、この馬鹿亭主！」

ゴソツ！と鈍い音がして、男の人が崩れると隣にとっても美人な女の人
が立っていた。

彼女は私に振り向くと、手を掴んで微笑む。

「ごめんねー？こんな馬鹿も居るけど、今日ライブやる子達は良い音楽奏でる子達だからさ！」

「は、はい」

「あら、それ…」

彼女はチケットの半券を見つめると、私をまじまじ見つめて隣の男の子に話しかける。

「ヒロ、この子関係者？」

「ううん、違う。だけど、そのチケット持つてるってことは誰か知り合いかも」

「え、え？」

「ねえ、名前なんだっけ？」

「あ、私は…アサって言います」

ヒロって呼ばれてるその人は、『あっ』と声を出すと私の手を握った。

「うわー！アキラが言ってた子かあ！うんうん、俺ヒロトよろしくー！！！」

「よ、よろしくです…」

「へええ…ふんふん」

「あ、あのー…」

「ヒロトくん？ほらほら準備しなさい」

「あ、ごめんアヤさん。アサちゃんまたねー！」

ヒロトさんは、私の手を離すとライブハウスの中へ入って行った。

私は呆けっとしてしていると、背中を緩く叩かれる。

アヤさんが私を見てにこりと笑った。

「もしかして、アキラちゃんが言ってた子ね？」

「アキラ…あ、クボさんですか？」

「うん。ふふ、可愛い子じゃない〜」

「そ、そんな…」

「さ、この馬鹿はほっというて中に入りましょ？アキラちゃんの知り合いならドリンク奢るわよ〜」

アヤさんは強引に私の手を引くと、ケンジさんは苦笑いを浮かべな

がら手を振ってくれていた。

(ヒロトさんの声、何処かで…聴き覚えがあつたな…なんだっけ…)

お酒が入ったカップを緩く回しながら、私はアヤさんに勧められた席に座っていた。

ライブハウスの中は結構広くて、既に大勢の人が居た。

どちらかと言えば、女性が多かった気がする。

可愛い子がたくさん居る中に自分が居ると、少しだけ自己嫌悪になる。私の悪い癖だ。

(皆、今日やるバンドの人達が凄い好きなんだろっなあ…お化粧とか凄いバッチリ決めてる感じ)

私は、自分の服装と彼女達の服装を交互に見つめる。

(何か、気の入り様が違う気がする…って、私はライブを見に来たんだぞ！服装とかそんなの関係ないじゃん！！)

自己嫌悪に陥る自分を取り払うようにお酒を飲む。少しだけ、身体が熱くなった。

その時ライブハウスの光が、ふっと消えた。

声援何か、もう聞こえていなかったと思う。それぐらい私はライブに夢中になっていた。

初めてのライブなのに、私は凄くのめり込んでいた。

そしていつの間にか、ライブは最後のバンドを迎えていた。

(……最後のバンド…私の好きな)

「俺達が締めでいいのかなー？」

(え…?)

私は顔を上げると、ヒロトさんがマイクを握って喋っていた。

周りの女の子達が悲鳴に近い声援を上げる。

私はカップをテーブルに置くと、何を考えたのかステージの近くに足を運んだ。

「今日はさー、俺らのバンド結成して3年目になるんだよね！」

「そうだったっけ？」

「うわっ、カズひでえ！覚えてるよー！」

「覚えてるって、なあアキラ？」

“アキラ”、その名前に私は反応する。
そして視線の先に、彼は立っていた。

「そうだね、カズ」

(嘘、クボ…さん……?)

頭の中に色々な物が詰め込まれて、爆発しそうな感じがして、私は後ずさって椅子に座った。
ぐるぐるする感情と、何とも言えない言葉が出て来そうな感じがした。

いや、出て来そうだった。

『あ、俺この曲聴いたことあるわ。最近出てきたバンドだよね』

あの時、彼の目の前で泣いてしまったあの日。
私は彼のバンドの曲を聴いていたのだ。

そして、今。私は此処で彼のバンドの曲を聴こうとしている。

(夢……じゃない？夢？)

徐々に嬉しさが込み上げてくる。

私が立ちあがると、下を向いていたクボさんが顔を上げた。

『

』

(えっ？)

彼は口を動かすと、私を見て笑った。

「行くぜー……！」

ヒロトさんの掛け声と共に、私の好きな音が耳に流れ始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1532o/>

音恋

2010年10月14日15時03分発行